



19世紀における「男らしさの危機」：
監獄、徒刑場、植民地

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-05-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅澤, 礼 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15904

第2回講演
「男らしさ」とは？（2）

19世紀における「男らしさの危機」

——監獄、徒刑場、植民地——

梅澤 礼

はじめに 「男らしさの勝利」？

「男らしさ」を表す言葉として、フランス語には « masculinité » と « virilité » がある。このうち前者が単なる生物学的な性質を指すのに対し、後者は男性の身体的、道徳的、性的な特質を示す。2011年、アラン・コルバン、ジャン＝ジャック・クルティエヌ、ジョルジュ・ヴィガレロは、編著 *Histoire de la virilité*（邦訳『男らしさの歴史』）を出版した¹。これが中世から現代までの専門家40名による全3巻の大作であるということからも、フランスの言語文化研究において「男らしさ」がどれだけ豊かなテーマであるかがうかがえるだろう。

その『男らしさの歴史』のうち第2巻は19世紀に特化しているが、サブタイトルが「男らしさの勝利」であることからわかるように、男らしさのポジティブな面のみが取り上げられている。しかし、たとえば同時代の文学作品に目を向けてみると、必ずしも「男らしさの勝利」を裏付けるものばかりとはかぎらない。

¹ Alain Corbin, Jean-Jacques Courtine, Georges Vigarello, *Histoire de la virilité*, I, II, III, Seuil, 2011.

19世紀の男らしさは、どのようにして第3巻のサブタイトルでもある「男らしさの危機」を準備したのだろうか。この問いへの答えを、本稿では囚人たちの男らしさという、マージナルな男らしさに注目することで探ってゆきたい。

1. 不正な男らしさ

ジャン＝ポール・チュイエによれば、男らしさの条件とは、伝統的に「戦士の身体やスポーツ選手の身体²」をしていることであった。とくに「古代ローマの男は日に焼けた顔と身体を呈して」おり、セネカも「男らしさとはコロラタ（ブロンズ色、日焼けした顔色）であること」だとしていたという³。

19世紀のフランスに目を向けてみると、こうした昔ながらの男らしい身体の持ち主の中には、軍人やスポーツをする者はもちろんのこと、徒刑囚もいたことに驚かされる。なぜなら強制労働刑に服する彼らは港湾部での肉体労働に従事しており⁴、その筋肉は発達し、肌は日に焼けていたからである。このようなわけでオノレ・ド・バルザックが生み出した脱走徒刑囚ヴォートランの身体は「広い肩、発達した上半身、目に見える筋肉⁵」で際立ち、ヴォートランが化けている神父カルロス・エレラについても、

ずんぐりして背が低く、大きな手、大きな上半身、ヘラクレスのような力、見せかけの寛容さでやわらげられた恐ろしい目つき（…）。内から外へは何も通さない日に焼けた（bronzé）肌の色は、愛着より

² Jean-Paul Thuillier, « Virilités romaines. Vir, virilitas, virtus », in *Histoire de la virilité*, I, p. 87.

³ *Ibid.*, p. 85.

⁴ こんにち我々がイメージするような刑罰としての監獄が現れるようになるのは、フランス革命期のことである。ナポレオンが皇帝になると、監獄を使った刑罰は大きく3つに分けられ、これに合わせて監獄も3種類に分けられた。のちに述べる拘禁監獄、禁錮監獄、徒刑場である。

⁵ Honoré de Balzac, *Le Père Goriot*, dans *La Comédie humaine*, t. III, Gallimard, 1976, p. 60.

もずっと嫌悪を感じさせた⁶。

と、屈強な体に加えてブロンズの肌色が、その正体を見破るヒントとして読者に提示されているのである。これはヴォートランにかぎったことではない。同じく徒刑場で長い年月を過ごした『レ・ミゼラブル』のジャン・ヴァルジャンもこのように描かれている。

それは中背の、がっしりしてたくましい盛りの男だった。46、7歳といったところだろうか。目深にかぶった、革のつばつき帽は、汗の流れる、太陽と日焼けで焦がされた顔を一部隠していた⁷。

たくましく日焼けしたジャン・ヴァルジャンの外見は、町の人々はもちろんのこと、当時の読者にも不安を覚えさせたことだろう。屈強な身体と日に焼けた肌は、徒刑囚である可能性を示す社会的な、文学的なコードだったのである。

徒刑場が、もっとも罪の重い男たちの行き場であったことにも注意が必要である。ふつう犯罪者は、まずは軽犯罪で拘禁監獄へ、軽犯罪が重なって禁錮監獄へ、そして重罪を犯して徒刑場へ送られるという道程をたどっていた。このことは、未決囚監獄にいたある囚人も証言している。

フォルス監獄に到着した若者たちが、恥ずかしさから顔を真っ赤にして、やっとのことで嗚咽をこらえているのを私は見た。(…) 1週間後、彼らは陽気だった。色々と学んだのだ。そしてこの致命的な学習の成果として、彼らは将来を築くのだった。この不幸な者たちは、トゥーロンかプレストの徒刑場で学位を取得して、今度はきっと自身が教授になるのだ!⁸

⁶ *Id.*, *Les Illusions perdues*, dans *La Comédie humaine*, t. V, Gallimard, 1977, p. 705.

⁷ Victor Hugo, *Les Misérables*, dans *Œ. C.*, t. X, Le club français du livre, 1969, p. 63.

⁸ Anonyme, « La Force », in *Paris, ou le livre des cent et un*, t. IX, Ladvocat, 1832, p. 146.

初めて裁判を迎える囚人が、最初は弱々しく、しかし1週間後には凶々しくなり、やがては徒刑場へ至るというのである。監獄や徒刑場は、悪の道を進むうえでの強靱な肉体と精神という、いわば「不正な男らしさ」とでも呼ぶべきものを、囚人に段階的に与えてゆく場所だったと言えるだろう。

しかしすべての囚人が男らしい身体をしているというわけではない。たとえばヴォートランの徒刑場仲間であるテオドールは次のように描写されている。

テオドール・カルヴィは青ざめて暗褐色の顔色をした、金髪で、濁った青色のくぼんだ目をした若者だったが、均整はとてもよく取れていて、そのリンパ質の外見の下には、地中海の人々がときどき見せるような驚くべき筋力が隠されていた⁹。

テオドールは、血色が悪く、コルシカ人特有の身体能力もリンパ質な外見に隠れてしまっている。リンパ質とは、エミール・リトレによれば、色が薄く（*peu de coloration*）、強さのないようすを示す。つまりテオドールというこの元徒刑囚には、例の「不正な男らしさ」が少なくとも外見上は見られないのである。しかもテオドールの逮捕はこのようなものだった。「夜の10時半、クール・サン＝ギヨームの屑鉄屋が女装したテオドールに金を数えているとき、警察がガサ入れし、テオドールを逮捕、盗品を押収したのだった¹⁰。」青ざめて弱々しく見えるだけでなく、女装もできてしまうテオドールという囚人は、両性具有的な囚人なのである。

2. 監獄における男らしさの危機

しかしテオドールが例外というわけではなかったようである。犯罪を企

⁹ Balzac, *Splendeur et misères des courtisanes*, dans *La Comédie humaine*, t. VI, 1977, p. 860.

¹⁰ *Ibid.*, p. 854. 傍点筆者。

み、遂行するにあたって、囚人たちは独自の言語、隠語を使用する¹¹。当時の隠語はおもに3つのタイプに分けられた。1つめは「*dab*」（親分）のように標準語に存在しない言葉である。2つめは「*vousaille*」（お前たち／あなた）のように、標準語に何かを足した言葉である¹²。そして3つめは「*ouvrier*」（盗人）のように、標準語には存在するもののまったく異なる意味を持つ言葉である¹³。同様に「*tante*」という言葉も、標準語では叔母を意味するが、隠語では同性愛者、それも受動的なほうの同性愛者を指していた。つまりこの隠語は、囚人同士の性愛の存在を証言しているのである。また図1のように、徒刑囚は脱走防止のために二人一組で足と足とを鎖でつながれていたが¹⁴、このことは「*mariage*」という、本来は結婚を意味する言葉で呼ばれていた¹⁵。これも、単なる足と足の結びつきにとどまらない、性的な暗示を含んでいる隠語と考えることができるだろう。

このことは図2からもうかがえる¹⁶。これは徒刑囚が徒刑囚によって鎖



図1



図2

¹¹ 隠語は19世紀前半、人々の関心の的であり、当時の文学作品の中でも使用されている。cf. 梅澤礼『『パリの秘密』における隠語の使われ方について——1840年代の隠語と文学——』、*Les Lettres françaises* 33号、上智大学フランス語フランス文学会、2013年。

¹² フランス語で「*vous*」は、君たち、もしくはあなたという意味になる。

¹³ 「*ouvrier*」は本来労働者を意味する。

¹⁴ 出典、<http://www.criminocorpus.org>

¹⁵ ヴォートランとテオドルもこの「*mariage*」の関係にあった。

¹⁶ 出典、J-J. Clémens, *La Légende noire du bagne*, Gallimard, 1992. (初版は1840年。)

をつけられるようすを描いた挿絵であるが、右側の徒刑囚が屈強な身体をしているばかりか、鎖を「打ちこむ」という男らしい動作をしているのに対し、鎖をつけられるために横になっている囚人のほうは、身体が丸味を帯びているだけでなく、臀部を突き出して、流し目で足枷を（もしくはその先にいる彼を）眺めてはいないだろうか。そもそも革命以前、徒刑場の前身であったガレー船には同性愛者も送られていた。徒刑場は、囚人たちのみならず人々の意識のなかでも、古くから同性愛と結びついていたのである。



図3

だが同性愛がはびこるのは徒刑場だけではない。図3は『パリの監獄』（1846）の挿絵で、かつてのコンシェルジュリー監獄のようすを表したものである¹⁷。片隅に囚人が三人固まっており、奥から、一人は青年、一人は老人、そして手前に寝転んでいるのは少年である。青年と老人は敵意をむき出しに、少年は挑発的な目でこちらを眺めている。この挿絵は、古いも若きも区別なしに閉じ込める十数年前の監獄のあり方を批判するとともに、犯罪が世代を経て受け継がれてゆくことへの不安を表しているのである。また、

左手前に置いてある甕に注目してみよう。この甕は、彼らの飲む水を入れたものと考えられるが、一部が欠けている。甕はしばしば処女性の比喩となるが、その甕に割れ目が生じているのである。ささいな細部にすぎず、本来ならば描かれなくてもよいはずのこの甕には、後ろに横たわる少年の性的退廃を暗示する役割が持たされているとも考えられるのである。

このように当時の隠語や挿絵は囚人同士の性愛をほのめかしているわけであるが、テキストもまたこれについて語っている。たとえばフォルス監

¹⁷ Maurice Alhoy et Louis Lurine, *Les Prisons de Paris*, G. Havard, 1846, p. 83.

獄は、バルザック、ユゴー、デュマ（父）などの小説に登場する。ところがそうした文学作品では触れられていない、この監獄のある側面が、当時流行したパノラマ文学のひとつ、『パリ、百と一の手紙』では描かれているのである。

囚人たちは2ピエ半あるかないかのベッドに2人で寝る。ここで当然、この共寝について考察が生じる。共寝は、自然に対する、そして良俗に対する、もっとも残酷な違反である恥ずべき悪徳を助長するのだ¹⁸。

1ピエは約33センチであるから、幅2ピエ半のベッドとは幅80センチ強、つまりシングルサイズのベッドということになる。ここに囚人が2人ずつ寝ることで生じる悪徳、それは同性愛にほかならない。

このことをパノラマ文学よりもさらに赤裸々に描いたのが、監獄を舞台にしたノンフィクション小説『門の奥』である。作者のイポリット・レナルは、若かったころ浮浪の罪で留置所に入っていたのだが、そこでは成人と少年が同じ部屋に入れられていた。こうして彼の友人であったアルチュール少年は、牢名主に強姦されてしまうのである。そのようすをレナルは次のように描いている。「アルチュールは牢名主の暴力から逃れるべく努力したのだが、牢名主は鉄の腕で彼を引き寄せ、服を脱がせようとした¹⁹。」牢名主は成人であり、アルチュールは少年である。そのため牢名主は、身体的な力はもちろんのこと、少年を前にふるいたつその精力においても、また、衆人環視のもとで行為に及ぶという精神的な力においても少年を上回っている。いわば牢名主はあの「不正な男らしさ」を体現する者なのであり、それはアルチュールという、年が若く、監獄に入ったばかりで、一言で言えばこの不正な男らしさをまだ身につけていない者に対して、誇示され、行使され、強化されるのである。フロランス・タマーニュ

¹⁸ « La Force », p. 151.

¹⁹ Hyppolite Raynal, *Sous les verrous*, A. Dupont, 1836, pp. 72-73.

が20世紀の監獄における同性愛について述べていることは、19世紀の監獄でも見られたということになる。

一部の男たちはこうして、繰り返される強姦の結果として、「女性的な」役割を負うことになるのだが、能動的な役を取ったほうは、同性愛者としてみなされないだけでなく、反対に男らしさが強まることになるのだった²⁰。

では受動的な側の囚人はどうなったのだろうか。作者によればアルチュール少年は、「食事を奪われていることと、別の類のことをしすぎたせいで、健康を明らかに損ねていった²¹」という。食事の不十分さだけでなく、男性を相手にした過度の性交渉によって衰弱してゆくアルチュールに、監獄で身につけられるはずだった「不正な男らしさ」を見出すことはできない。同じことは、別の青年についても言える。

私と同じ時期、サン＝ドニには、ジョランという、20歳の、美しい顔をした、穏やかで気立てのよい青年がいた。（…）毎晩、今にも消えそうな明かりの下で、このジョランは、このベッドで、16回も男を変えていたのだ！新しい男が来るとパンのかけらがもらえ、彼はそれをうめきながらむさぼっていた！かわいそうに！ほどなく私はおそろしい状況に陥った彼を見ることになった。彼の体は皮膚のはがれた、ぞっとするような潰瘍でしかなかったのだ²²。

パンのかけらと引き換えに一晩に何人もの相手をするジョランの身体は、やがて梅毒のものと思われる潰瘍で覆われてしまう。男役の囚人たちが、彼を犯すことで肉体的に、食べ物を与えることでジェンダー的に男らしさを強めてゆく一方で、彼自身の男らしさは日々奪われてゆくのである。監

²⁰ Florence Tamagne, « Mutations homosexuelles », in *Histoire de la virilité*, III, p. 366.

²¹ Raynal, *op. cit.*, p. 199.

²² *Ibid.*, pp. 161-162.

獄は一部の者たちの不正な男らしさを強めると同時に、別の者たちの男らしさを衰退させる場所であったということになるだろう。

3. 囚人の男らしさという脅威

同性愛は、当然のことながら女囚の間でも生じうるものである。しかしこの時代、女性用監獄について語られることはあっても、同性愛に触れられることはほとんどなかった。たとえばウージェーヌ・シューは連載小説『パリの秘密』の中で、ヒロインを女性監獄に入れている。そこには雌狼と呼ばれる、怒りっぽいが勇敢な性格をした女囚がおり、ヒロインを危険から守ってくれる。雌狼はいわば「男らしい女囚」なのであり、ヒロインという「女らしい女囚」とは対照的に描かれているのである。それでも二人の女囚の間に友情以上の感情が生まれることはない。雌狼は最終的に、強くて正義感にあふれた、本来の意味での「男らしい囚人」と結ばれるのである。バルザックの『現代史の裏面』では、女囚たちがラ・シャントリー夫人によって不道徳から救い出される場面がある。しかしこの女囚たちはもともと売春婦であり、その不道徳とは異性を相手にしたものと想像される。女囚に特化した唯一の作品である『監獄の女性たち』の作者ジョゼフィーヌ・マレも、女性監獄には「純粹で無垢な想像力を台無しにすることにおぞましい快楽を覚える、恥も羞恥心もない受刑者の、墮落した女の社会」があり、間違っって逮捕された少女たちがそこで数ヶ月を過ごすことに警鐘を鳴らしている²³。女性監獄で危ぶまれるのは、同性愛ではなく、売春の教唆なのである。図4の『パリの監獄』の挿絵でも、うなだれる若い女囚に年上の女囚がなにやら語りかけているが、二人の体は密着しておらず、愛の言葉がささやかれているようには見えない²⁴。むしろここでは若さと老い、羞恥心と老獪さ、真っ白なスカートと手垢にまみれた薄汚れたスカートから、同性同士の不道徳よりも異性愛における不道徳の危機が

²³ Joséphine Mallet, *Les Femmes en prisons. Causes de leurs chutes, moyens de les relever*, Marc Aurel, 1843, p. 173.

²⁴ *Les Prisons de Paris*, p. 130.



図4

感じられはしないだろうか。このように当時の資料には女囚の同性愛についての証言はほとんどなく、女囚についての記述すらあまり見つけることができない。そもそも囚人や犯罪者といった者たちについては、社会が感じる不安がその言説を生み出す大きな原動力となるのであって、社会的危険性が少ないと思われていた女囚たちは無視され、売春婦に関する言説の中に埋もれてしまっている。

逆に言えば、男性囚人の同性愛に関する言説の多さは、それに対する社会的不安の表れであるということにもなる。なぜ男性囚人の同性愛は不安を感じさせたのか。たとえば同性愛は古代ギリシャでも頻繁に見られたが、社会問題になることはなかった。モーリス・サルトルはその理由を次のように説明している。

若者は、女性がそうであるように、一人の男性の権力に屈服し、支配される。とはいえ、この若者がのちに嫡子を作るということ、つまり男性としての性的能力を市民の永続のために行使することは自明の理である²⁵。

つまり古代ギリシャでは、女役をつとめた若者も社会に戻れば男らしさを発揮していたのである。同じことは近代の軍隊についても言える。監獄と同様、男だけの集まりであり、同性愛がはびこっていることが想像された軍隊であるが、やはり同性愛は市民生活に戻れば忘れられる、あくまで一時的なものと考えられていたのである²⁶。ところがヴォートランのモデル

²⁵ Maurice Sartre, « Virilités grecques », in *Histoire de la virilité*, I, p. 37.

²⁶ Jean-Paul Bertaud, « L'armée et le brevet de virilité », in *Histoire de la virilité*, II, p. 110.

でもある元囚人ウージェーヌ＝フランソワ・ヴィドックは、囚人の同性愛のことを「ときどき囚人たちが社会にその種をもたらし、いまわしい悪徳²⁷」と呼んでいる。監獄の悪徳は、そこでのみ見られるものではなく、釈放囚によって社会にまでもたらされるというのである。だからこそ非行少年のレナルも次のように叫ぶのだ。「ため息をつけ、夢を美化せよ、フランスの美しい乙女たち、法律はあなたたちに両性具有の婚約者を用意しているのだ²⁸。」このレナルの予言には、フランス全体を衰退させる「変質」に対する19世紀後半の強迫観念が、すでに先取りされているかのようである。

また同性愛は、未成年の囚人の間でも起こりうるものだった。しかし19世紀前半の少年監獄は、共同収監ではなく、少しずつ個別収監を行うようになっていた。そのため少年囚人については、同性愛よりもむしろ自慰行為が警戒されていたのである。たしかに自慰行為そのものは、単に道徳の問題であり、社会的不安を起こすようなものではない。しかし18世紀末以来、精液は「精巣の中で血液から作り上げられ、肉体すなわち男性の体を、とくに使われなかったものは血液に戻ることで、男らしくする力がある²⁹」と考えられていた。つまり精液を無駄にする自慰行為は、その者の男らしさを無駄に弱め、体を衰弱させるというのである。事実この19世紀

²⁷ Eugène-François Vidocq, *Les Voleurs*, t. II, France-expansion, 1973, p. 248. (初版は1837年。)

²⁸ Raynal, *op. cit.*, p. 156.

両性具有的存在は、村田京子が「19世紀フランス文学・絵画における両性具有的存在——『男らしさ』の観点から——」(2017年12月16日、大阪府立大学女性学講演会)で述べているように、ロマン主義時代においては男らしさの一部を体現する存在であった。とはいえ村田があげたように、バルザックの『サラジューヌ』では、ザンビネッタが「何ものにも生命を与えることができない」「怪物」と呼ばれている。成人しても女にとどまろうとする者は古代ギリシャでは蔑みの対象となっていたが、ロマン主義時代においても両性具有的な美は、あくまで一時的な状態であるかぎりにおいて受け入れられていたように思える。なお「怪物」は古くから天の警告を共同体に示す存在であり、その点において共同体の一員だったわけであるが、1830年代にイジドール・ジョフロワ＝サン＝ティレルによって奇形という名称を与えられてからは、共同体の構成員とは別種存在として捉えられるようになってゆく。このことも社会における両性具有的存在の地位に少なからず影響を及ぼしたのかもしれない。

²⁹ Anne Carol, « La virilité face à la médecine », in *Histoire de la virilité*, III, p. 33.

半ば、成人の囚人の中には独房で精神を病む者が何人も確認されており、それは自慰行為が原因の「エロティックな衰弱³⁰」であると説明されていた。しかもこれは、さきほども少し触れた変質理論が確立されつつあった時代にあたる。変質理論とは、個人が肉体的、精神的、性的に変質すると、それが遺伝によって悪化し、やがて社会全体を変質させるというものである³¹。その原因の一つとして、ほどなくこの自慰行為——犯罪者のように不道德な者のみに見られる性的墮落——があげられることになるのである。監獄で生まれた男らしさの危機は、変質理論を介して、フランス全体の男らしさの危機として19世紀後半にかけて広まっていったと言えるだろう。

4. 19世紀後半における囚人の男らしさ

その後、囚人たちの男らしさはどのようなものになっていったのだろうか。じつは19世紀後半、囚人たちに触れたテキストの数は大きく減る。すでに述べたように、犯罪者や囚人に関する言説の数は社会的不安の大小によって変化するわけであるから、彼らは以前ほど脅威とはみなされなくなったということになる。なぜか。それは彼らが植民地に送られるようになったからであると考えられる。

すでに七月王政期、政府は徒刑囚をアルジェリアに移送しようとしていた。その理由は、一般に以下の3つであるとされている。まず、徒刑場は非人間的であるという世論が以前から高まっていた。次に、港湾部で

³⁰ Louis-Mathurin Moreau-Christophe, *Défense du projet de loi contre les attaques de ses adversaires*, Bureau de la Revue pénitentiaire, 1844, p. 182.

³¹ ミシェル・フーコーは性にまつわる科学が、「本質的には道徳律の命令に従属した科学であり、道徳律の分割思考を、医学的な規範という形でむしかえしていた」とし、「性的欲望にほんの僅かな変動を認めるや、それこそ、幾世代にもわたって悪影響をもたらす様々な悪が支配権を振るっているに違いないと想像し（…）気の弱い人間の目を選けた習慣や、およそ孤立した取るに足らぬ偏執をも、社会全体にとって危険極まるものであると断言した」と指摘している。精神医学が自慰行為を変質の原因の一つにあげたこともこれに当たるだろう。（ミシェル・フーコー『性の歴史 I 知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、1986年、70頁。）

の徒刑囚の労働は、もはやそれほど必要ではなくなりつつあった。反対に、植民地を開拓する人手は足りていなかったのである。こうして1844年、徒刑囚のアルジェリア移送が着想されたわけであるが、それは二月革命によっていったん白紙に戻ったのち、第二共和政以降、法律となって次々に姿を見せてくる。1850年には政治犯がニューカレドニアへ、1854年には徒刑囚がギアナへ、そして1885年には累犯者がニューカレドニアとギアナへそれぞれ送られることとなり、フランスを離れていった。

囚人の植民地移送は、すでに述べたように徒刑場を廃止し、植民地を開拓するためであったと考えられている。しかし移送の対象となったこれらの囚人たちには、共通点がある。それは、みな罪の度合いの重い者たちであるということ、言い換えれば社会的不安を強く感じさせる者ばかりであるという点である。そうした囚人たちがフランスから追い払われ、本国に残るのは罪の度合いの軽い囚人のみとなった。つまりフランスには例の不正な男らしさを身につける前の囚人だけが残ったということであり、これによりフランス全体の男らしさはもはや脅かされなくなったのである。

他方、植民地に送られたほうの囚人たちはというと、灼熱の土地での肉体労働を課せられることとなった。もともと屈強な肉体と日に焼けた肌を持つ彼らは、まさに適任ということになる。しかも植民地は原住民の存在に脅かされていた。そのことは、クリステル・タローの言うように、アルジェリアの原住民が猛獣にたとえられていたことからもうかがえる³²。だが、囚人たちはどうだろうか。これは、19世紀半ばの囚人表象である。

60人もの人間が詰め込まれている場所が、壁を揺るがず獐猛とも言える叫びをかき消していなければ、必ず批判されて、刑罰の行き過ぎは止められ、こうした人間たちも少しずつ生来の尊厳を取り戻し、吠えるのをやめて話し出すだろうに³³。

³² Christelle Taraud, « La virilité en situation coloniale », in *Histoire de la virilité*, II, p. 333.

³³ « La Force », p. 142.

囚人たちは壁がふるえるような獐猛な叫び声をあげ、話すのではなく吠えており、人間としての尊厳を失っているというのである。それは監獄が非人間的であるからなのだが、やがて囚人自身が生まれつき獐猛なのだと考えられるようになってゆき³⁴、バルザックも、犯罪者にとってのパリを猛獣にとっての原始林のようなものだとしている³⁵。バルザックに関してはあくまで小説であるためほかの例と単純に並べることができないが、それでも猛獣としての囚人像が一般的なものだったと言うことはできるだろう。つまり19世紀半ば、囚人たちは猛獣にたとえられていたのであって、同じく猛獣にたとえられていた原住民から、植民地を守ることが期待されていたということになる。

このことをとてもよく反映しているのが、シュアの『パリの秘密』である。作品には元徒刑囚が登場するが、彼は主人公に出会ったことがきっかけで改心する。この元徒刑囚を、主人公はアルジェリアに派遣する。そしてアルジェリアの土地を開墾することと、原住民から土地を守ることという2つの使命を彼に与えるのである。このように囚人たちの植民地への移送には、猛獣からは猛獣で、不正な男らしさからは不正な男らしさでフランスを守るという側面があったということになる。ミシェル・フーコーも指摘していることであるが、ヴィドックやヴォートランのように犯罪者が犯罪者を取り締まることの有効性にフランスは気づいていた³⁶。それと同じ図式が、囚人の植民地移送にも見られるということになるのである。

また、植民地における一般的な入植者と原住民との関係を、クリステル・タローは「ヨーロッパ人が力強く男らしく征服する者であり、原住民が弱くて受け身で敗北した女である結びつき³⁷」と説明している。このことも踏まえて整理するならば、囚人たちが植民地へ送られるようになった背景には、これまで言われてきたような単なる植民地の労働力確保だけで

³⁴ 「生まれつき血を好む、獐猛な動物というものがいる。そして獐猛な人間というものがある。強姦、盗み、殺人は、彼らにとって純粋に本能のなせるわざなのだ。」 Moreau-Christophe, *De la réforme des prisons en France*, Chez Husard, 1838, p. 168.

³⁵ Balzac, *Splendeurs et misères des courtisanes*, p. 831.

³⁶ フーコー『ミシェル・フーコー思考集成5』、筑摩書房、2000年、363-364頁。

³⁷ Tarda, *art. cit.*, p. 334.

なく、不正な男らしさを持つ者を遠ざけて本国の男らしさを守るという目的とともに、原住民と同種の男らしさを持つ者によって植民地を「開墾する」、つまり植民地に種をばらまかせ孕ませるというねらいも浮かび上がってくるのである³⁸。

ではそのねらいは達成されたのだろうか。普仏戦争の際、アルジェリアの兵士たちはフランス軍の一員として参加し、彼らの男らしいふるまいは新聞でも報道された³⁹。しかしながら敗戦を喫したフランスは、その原因を探る中で、本国の軍人の変質に関する研究を始めるのである。植民地の「飼いならされた」不正な男らしさは本国を守ったが、本国の男らしさは変質してしまっていたのであり、その原因の究明にフランスは追われたということになる。

同じころ、文学作品にも植民地帰りの男たちが登場するようになる。たとえばエミール・ゾラの『パリの胃袋』では、ギアナに送られていた主人公が脱走してパリに戻ってくる。同じくゾラの『ジャック・ダムール』でも、ニューカレドニアに送られていた主人公が、やはり脱走してパリに戻ってくる。しかし彼らは、植民地で男らしさを身につけた凱旋者ではない。『パリの胃袋』の主人公フロランはやせ細った男で、空腹を抱えてパリに戻り、作品中ずっと女たちに圧倒されている。ジャック・ダムールも、パリには這々の態で現れ、妻を取り戻そうとするものの新しい亭主に気圧され、最後は娘に助けられて暮らすことになる。これら植民地帰りの男たちは、みな熱帯の国で疲弊しきっており、精神的にも肉体的にも、そして性的にも弱まってフランスに戻ってくるのである。あたかも植民地で課せ

³⁸ 植民地と男らしさについて、リディ・ムディレノはピクナールの『皆殺しのモンパール』(1804)において、若者だけで構成された海賊たちも一定の年齢になると植民地の異性愛的規範に戻り、「文明化した男らしさ」を呈するようになる」と説明している。とくに本国から来た女性との結婚は、「本国と植民地との象徴的な結合」なのだという。(ただしここでは本国が女、植民地が男の結びつきということになる。) Lydie Moudileno, « Hors-la-loi coloniaux ou dans la loi coloniale : masculinité du fibustier », dans Daniel Maira et Jean-Marie Roulin, *Masculinités en révolution, de Rousseau à Balzac*, Publications d'université de Saint-Etienne, 2013, p. 305.

³⁹ ドミニク・カリファ『犯罪・捜査・メディア——19世紀フランスの治安と文化——』、梅澤礼訳、法政大学出版局、2016年、241頁。

られた密林の奥での開墾作業によって、すべての男らしさを使い果たしてしまったかのように。

おわりに マージナルな男らしさが暴くもの

19世紀は「男らしさの勝利」の時代であると考えられている。しかし監獄で囚人たちが身につけていた男らしさは、それ以外の男らしさを衰退させうるものでもあった。この「不正な男らしさ」はやがてフランス全体を脅かすものと捉えられるようになり、ついには植民地へと追いやられていった。だがこうした試みにもかかわらず、フランスは19世紀後半になっても男らしさの強迫観念にとらわれつづけたのだった。

近代のフランスが陰で悩まされていた「男らしさの危機」は、いわばマージナルな男らしさによって暴かれたということになるだろう。社会の周縁に生きる存在は、しばしば社会の抱える問題の実態と、ときには解決の糸口をも示しているのかもしれない。